



# 人事ではない、イギリスのストライキ

今、ロンドンはストライキ時代の真っただ中です。ありとあらゆる労働者が、そこから中でストライキに入っているため、私たちの生活にかなりの影響を及ぼしています。去年から今現在にかけて、ストライキに入っている、または入っていたのは、地下鉄職員、バス運転手、警察、消防団員、学校教員、空港職員やオリンピック職員など様々です。どれもほとんどが公務員で、年末年始、またはオリンピックの前日など、あえて忙しい時期を狙ってストを行うことが目立っています。抗議内容は人員削減反対、賃上げ、労働環境改善が主です。

一昨日は、ダンスツアーでイギリス中部のリーズに行きました。しかし、動いている交通機関はほんの一握り。無論、駅内、路上は多くの人々でパンク状態、タクシーすらなかなか捕まえられない状態でした。

なんとか予定どおりにリーズの劇場に到着できたのですが、劇場付きの方に挨拶をしているときにふと気がつきました。「今日は、テクニシャンが3人ついてくれると聞いていたのに、1人しかいないのはなぜ…」恐る恐る聞いてみると、「申し訳ないのですが、今日は1人ストライキで来ません。もう1人は後から来ます。」とのこと。案の定、仕込みは遅れ、卓の打ち込みがギリギリで開幕時間に間に合いましたが、新しい舞台で満足なりハーサルもできないまま本番に臨んだダンサーと振付家のことを考えると胸が痛みます。

公演は無事、大成功に終わり、帰り際に例のテクニシャンに言われました。「今日は人が少なくてすみませんでした。実は僕もストに入る予定だったのですが(賃上げと労働環境改善のた

め)、僕までいなくなると君1人になってしまうかもしれないから、今日は僕が残ることにしました。劇場で働くのはお金にならないけど、これからも働き続けていけるような環境を自分たちの手で作らなければならないのです。」この言葉を聞いて、彼はこの仕事と劇場がとても好きなのだなど伝わってきました。彼の気持ちはとてもよく分かります。好きなことを仕事にした以上、多少の不利は多めに見なければならぬかもしれません。しかし、自分の仕事環境を改善したいという姿勢は、人に迷惑をかけない限り、決して悪いことではないし、必然的であると思います。

毎年の1月末から3月にかけては、私たち、特にフリーランサーにとっては苦しい時期です。なぜかと言いますと、源泉徴収がある月であり、1年で公演が一番少ない時期でもあるからです。その上、1年で一番寒くて雨続きの時期なので、冗談抜きで沢山の人が、顔色が悪いか機嫌が悪くなる傾向がありま

す。それでも、日本に比べるとイギリスの方が、舞台の仕事は多いのではないのでしょうか。スケールはピンからキリまでありますが、イギリスのほとんどの劇場やプロダクションはアーツ・カウンシル(半分は税金から、もう半分は宝くじの売り上げ)からサポートを受けています。2003年から年々、国が協会への支援を大幅にカットしているため、アーティストや舞台業界人はかなりの打撃を受けています。そして毎年、若い業界人が増えるので、自然と仕事も競争が激しくなってきます。能力、才能がある人はその中で生き残って行くことができますが、残れなかった人たちはストライキどころか、好きな仕事にも着けないという状況です。仕事への価値観は、人それぞれ異なりますが、仕事の給料や待遇以外のことで、仕事の価値を見いだせる人は、貧乏かもしれませんが、それなりに幸せなのかもしれません。

